

BMC International Climbing Meet 2008 報告書

杉野 保

5/10 から 8 日間、BMC(イギリス山岳評議会)の主催する「インターナショナル・クライミング・ミート 2008」に、日本山岳協会からの派遣という形で、杉野保と飯山健治の 2 名が参加した。その活動内容、登攀ルート、雑感などについて報告する。

・「インターナショナル・クライミング・ミート」について

1996 年に始まり今年で 10 回目を迎える BMC 主催のクライマー交流会。世界各国から 2 名ずつクライマーを招集し、共に登ることで各国クライマーとの交流、技術交換などを行い、さらには各国の山岳協会との繋がりを強固なものにし、UIAA をも盛り上げていこうというのが趣旨。日本からの参加は、前回のウィンターミーティングに引き続き 2 回目となり、夏のミーティングとしては今回が初めて。

1. 日時

2008 年 5/11(日)-5/18(日) 8 日間

2. 場所

イギリス ノース・ウェールズ (地図は別紙 3 参照)

ベースとなる宿泊所は「Plas y Brenin」と呼ばれる宿泊施設を持つ山岳センター。山岳やアウトドア活動全般のイベント、講習会などを行うための施設であり、BMC によって作られ「Maountain Training Trust」が運営する。

3. 参加者

杉野 保 (クライミングインストラクター/日本フリークライミング協会所属)

飯山健治 (フォトグラファー/日本フリークライミング協会所属)

各国からの参加者は 24 ヶ国から男女合わせて 46 名。(別紙 1 参照)

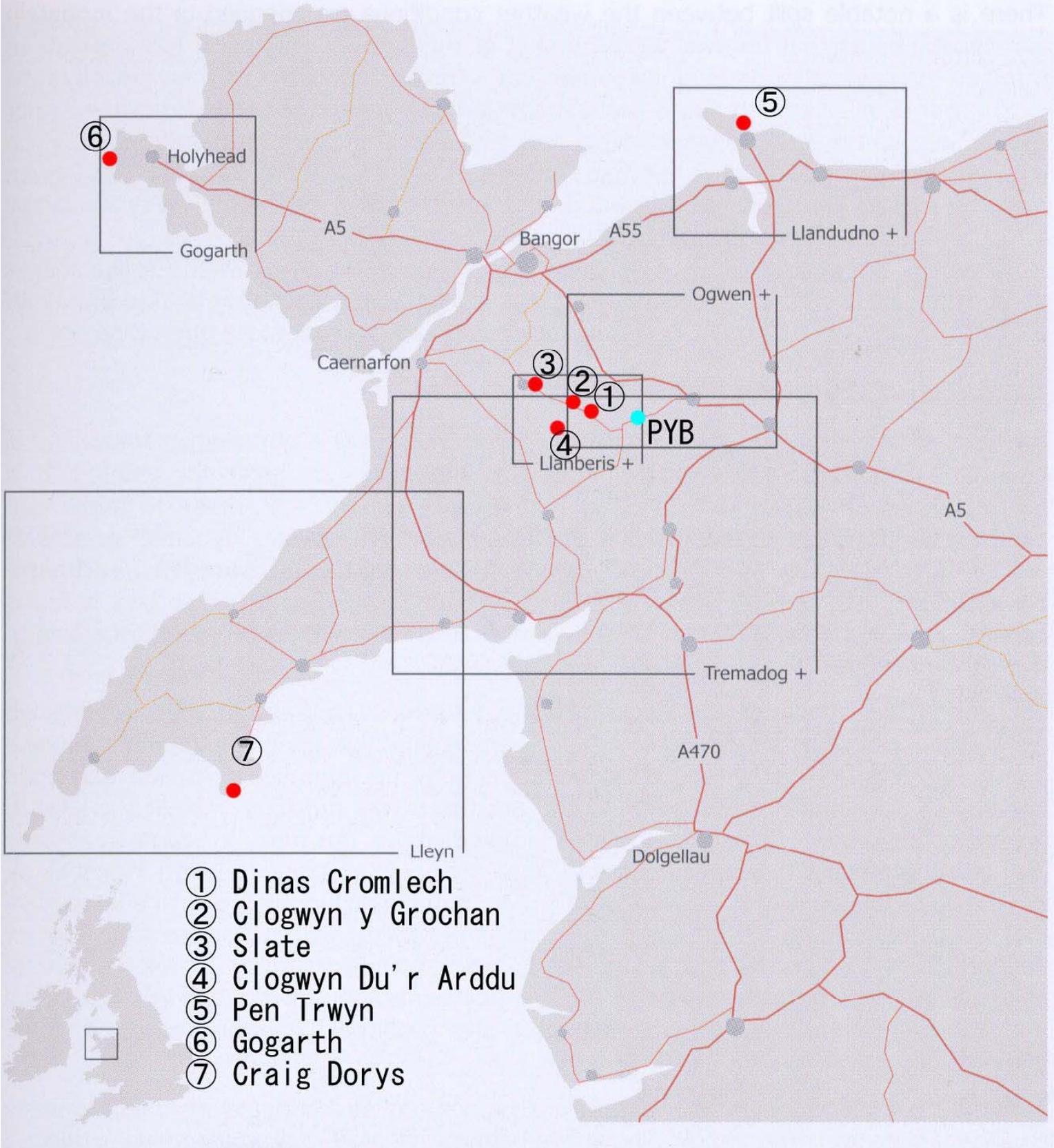
トラッドクライミングの本場だけにその手のクライミングに長けた人物が各国から集結した。ヨーロッパ、特に東欧諸国からの参加が多く、ほか遠方ではアメリカ、南アフリカなど。東アジアからの参加は日本だけであった。トラッドとは対局を成す国フランスからの参加がなかったのが興味深い。

世界的なトップクライマーとしてはベルギーからニコラ・ファブレスが参加した。

この参加者(ゲスト)全員にイギリス本国から集められたホストが一人ずつパートナーとしてつく。(別紙 2 参照)

4. 活動概略

North Wales Rock



5/10 20:40 ロンドン経由マンチェスター空港到着。空港近くのホテルに宿泊。
5/11 16:00 マンチェスター空港に各国からの参加者が集合。BMC のバスで宿泊所へ移動。所用約2時間。（日中はレンタカーにて、Peak District の Stanage Edge へ行き、約2時間ほど登った。）

（以下はミーティング中にクライミングを行った岩場の名称：地図は別紙3参照）

5/12 Llanberis / Clogwyn y Grochan （ランベリス/グローシャン）
5/13 Clogwyn Du'r Arddu （クロッキー）
5/14 Gogarth （ゴガース）
5/15 Lleyn / Craig Dorys （リーン半島/ドリス）
5/16 Llanberis / Slate （ランベリス/スレート）
Llanberis / Dinas Cromlech （ランベリス/ディナス・クレムレッチ）
5/17 Pen Trwyn （ペン・トルウィン）
5/18 BMC のバスにてマンチェスター空港へ。帰国。

・ミーティング開催中の、一日の活動パターンはほぼ以下の通り。

8:00-8:30 朝食
8:30-8:45 ブリーフィング（パートナーと移動手段の確認、天気予報ほか連絡事項など）
9:30 岩場へ移動
10:00-17:00 クライミング
18:00 宿泊所に戻る
19:00-19:30 夕食
20:30 各国ゲストによるスライドショーなど
21:30 ブリーフィング（翌日の予定など）

・宿泊施設について

ホテル形式の二人部屋が各参加者に用意されていた。シャワーやトイレなどの設備も部屋内に完備されていて快適。電話はないが無線 LAN 環境も整い部屋内からネット接続も可能。

・食事について

朝食と夕食が、宿泊施設内の食堂で提供された。セルフサービス方式で数種類のメニューから好みのものを選ぶことができる。飲物も自由。

昼食は、朝食時にランチパックが用意されていて、サンドイッチ、フルーツなどを好みのものを選んで持っていく。これらは参加費用に含まれているので無料。
食堂の隣にはバーがあり、ここでのアルコール類は有料となっている。

5. 費用

参加費は一人 85 ポンド（約 17500 円）であり、これに全日程の宿泊、食事、現地での交通費が含まれる。自己負担はマンチェスターまでの渡航費と、上記以外にかかる食費、生活

BMC International Meet 2008**International Guests**

Country	First name	Surname	M / F
BELGIUM	Nicolas	Favresse	M
BELGIUM	Seán	Villanueva O'Driscoll	M
CYPRUS	Georgia	Georgiadou	F
CYPRUS	Marios	Hadjipetris	M
DENMARK	Camilla	Hylleberg	F
DENMARK	Lars	Thorslund	M
FINLAND	Sari	Nevala	F
IRELAND	Colm	Ennis	M
IRELAND	Eoin	Kennedy	M
ISRAEL	Omer	Shavit	M
ISRAEL	Lindy	Kahanovitz	F
ITALY	Erik	Svab	M
ITALY	Rolando	Larcher	M
JAPAN	Tamotsu	Sugino	M
JAPAN	Kenji	Iiyama	M
LATVIA	Inga	Liepina	F
LATVIA	Anatoly	Sukov	M
LITHUANIA	Evaldas	Urbonas	M
LITHUANIA	Rimantas	Rauleckas	M
LUXEMBOURG	Ben	Lepesant	M
NETHERLANDS	Herrie	Heckman	M
NETHERLANDS	Corné	Brouwer	M
NORWAY	Thomas	Meling	M
NORWAY	Øystein	Andresen	M
PAKISTAN	Rehmat	Ullah	M
PAKISTAN	Faiz	Ali	M
POLAND	Jan	Kazatel	M
POLAND	Marcin	Opozda	M
PORTUGAL	José	Santos	M
PORTUGAL	José	Pereira	M
RUSSIA	Anna	Piunova	F
RUSSIA	Andrey	Kazakov	M
SERBIA	Radmila	Pejovic	F
SERBIA	Sinisa	Zoroja	M
SLOVENIA	Matjaž	Jeran	M
SLOVENIA	Luka	Krajnc	M
SOUTH AFRICA	Hannie	Morris	F
SOUTH AFRICA	Neil	Margetts	M
SPAIN	Gerber	Cucurell	M
SPAIN	Ferran	Martinez	M
SWEDEN	Christian	Lund	M
SWEDEN	Anders	Wester	M
UKRAINE	Svitlana	Nedosyukova	F
UKRAINE	Yuriy	Vasylenko	M
USA	John	Fodor	M
USA	David	Sharratt	M

費など。

今回は、東京-マンチェスター間の渡航費用全額を日本山岳協会より負担していただいた。

6. 登攀ルート

(以下は杉野の記録。飯山は本人からの報告を参照のこと)

NP=ナチュラルプロテクション

5/12

岩場：Llanberis / Clogwyn y Grochan (ランベリス/グローシャン)

パートナー：Sylvia Fitzpatrick

Spectre (HVS 5a) 4p (ツルベでリード&フォロー：ノーフォール)

この岩場の入門的な4ピッチのマルチルート

S S Special (E2 5b) (NP リード：オンサイト)

下部不明瞭なクラックからテラスを経由して上部はガタガタしたハング越えから右上。プロテクションも良く見た目ほど難しくない。

Stroll On (E3 6a) (NP リード：オンサイト)

節理に沿って登り途中でハングを越す。ハング越えのムーヴはレイバック状になる少々強引なムーヴ。越したあとプロテクションが取れずランナウトする。終了点というのも基本的にはないようで、このルートの場合は左に外れて灌木ビレイ。

Quasar (E3 6a) (NP リード：オンサイト)

さらに右のルート。一見して節理を追った弱点をついたルートで登りたくなる。やはり途中でハング越えあり。その上左に寄れば簡単になるがあえて直上、しかしプロテクションは取れず。

5/13

岩場：Clogwyn Du'r Arddu (クロッキー)

パートナー：Stuart Mcaleese

The Corner (HVS 5b) 21m+32m (NP リード：オンサイト)

2p目が印象的な大コーナーのルート。難しくはないが汚れていて登りにくい。プロテクションも意外に取りにくい。頂稜に抜けてビレイするが、ここにもまったくビレイ点はないので岩角かちょっとした節理を利用することになる。

The Troach (E2 5b) 37m+17m (NP リード：オンサイト)

3ピッチの人気ルート。1pは短いコーナー。

2p(37m)がハイライトで確かに見栄えのするフェイス。かなりチョークもついていて登り

BMC International Meet 2008**UK Hosts**

Forename	Surname	M/F
Rob	Adie	M
Julie	Baum	F
Jonathan	Bertalot	M
David	Brown	M
Ian	Bryant	M
Nick	Bullock	M
Jordan	Buys	M
Naomi	Buys	F
Leanne	Callaghan	F
Norman	Clacher	M
Rob	Davies	M
Graham	Desroy	M
Mark	Dicken	M
Dan	Donovan	M
Alun	Evans	M
Rob	Greenwood	M
Mike	Hammill	M
Graham	Harrison	M
Craig	Harwood	M
Colin	Hawes	M
Rachael	Hinchliffe	F
Alan	Hinkes	M
Elfyn	Jones	M
Susan	Leyland	F
Pat	Littlejohn	M
Steve	Long	M
Adam	Long	M
Gwilym	Lynn	M
Dan	McKinley	M
Fran	McNicol	F
Robert	O'Connor	M
John	Proctor	M
Jon	Ratcliffe	M
Dave	Rogers	M
Keith	Scarlett	M
Viv	Scott	M
Gary	Smith	M
Pete	Smith	M
Pete	Sterling	M
Mark	Stevenson	M
Alison	Stockwell	F
Andrew	Suttie	M
John	Trythall	M
Andi	Turner	M
Henry	Tyce	M
Andy	Wardle	M

こまれている。ホールドはポジティブなものが多く脆い部分も少ない。シャープなエッジもしっかりしているのでランナウトしていても不安は感じない。節理は切れ切れだがナッツや岩角にスリングも有効。顕著な岩角にスリングを巻き、ナッツもプラスしてビレイ点とする。古いピトンや残置のスリング、ナッツはあるがボルトの類は皆無。おそらくこの岩場にはひとつもない。

3p(17m) 易しいフェイスからリッジを登って抜ける。プロテクションはまったくとれない。

Great Wall (E4 6a) 30m+42m (NP リード : オンサイト)

1p(30m) 取り付きがいまいちよくわからなかったが、ラインの少し右から左上に上がって行くようだ。易しいがいきなりプロテクションが取れない。それでもホールドがしっかりしているので特に不安はない。そのあと右上気味に節理が続きプロテクションが良くなった。草付きの小さなテラスでピッチをきる。

2p (42m) プロテクションは1p目よりはるかに少なくなりとりにくい。ムーヴ的には悪くないが力が入ってしまい緊張する。露出感の高いフェイスを大きく右へトラバースする。ホールドは良く固いが、かなり大胆なランナウトになる。そうはいつでも危険を感じるほどではなく気持ちのいいプレッシャーといった感じ。弱点を縫って今度は左上。すっきりとしたフェイスはここまで。最後は狭いコーナー状になり腐ったスリングと残置ナッツのビレイ点に出る。有名なインディアンフェイスが右下に見える。黒々とした岩肌が余計不気味さを際立たせる。

5/14

岩場 : Gogarth (ゴガース)

パートナー : Adam Long

Perygl (E3 5c) (ツルベでリード&フォロー : ノーフォール)

1p 18m/4c ブロッキーなフェイス。傾斜も強く迫力があるが、ガタガタしていてラインがわかりにくい。登りだしてわかったのはとんでもなく脆い岩ということだった。傾斜は強いが難しくはない。ただ岩は汚くチョークも乗っていない。ほとんど登られていないようだ。

2p 25m/5c 広いクラックを右にトラバースしていく。この辺は脆くはないがブロックごと欠けるんじゃないかとさえ思ってしまう。プロテクションも取りにくくどれも効いているんだろうかと疑わしい。表面が欠けて出てきてしまいそうだ。ハングをひとつ越える。ここが核心らしい。ホールドはあるが持った感じがとにかく軽い。細かい苔もついて快適とはほど遠い。なんとも言えない緊張を感じつつハングを抜ける。そのあと傾斜は落ちたが、ここからラインが判然としなくなった。とにかく人の通った痕跡がない。まっすぐ上がってボロボロのフェイスからもう一段ハングを越そうとしてみたが、その上は苔がびっしりでラインとは思えず、アダムに声をかけてクライムダウン。ここでプロテクションを外しながら降りていくのはイヤな感じだった。スラブ状のレッジに戻りここでピッチを切ることにする。しかしアンカーが取れない。怪しいカムふたつにナッツ。自分の静荷重さえかけられないようなシロモノだが、ほかに節理はない。

3p 25m/5b

アダムは迷っていたが自分の通ったラインをそのまま上がり苔だらけのフェイスを右上してそのまま上に抜けた。これが正しいラインなのかは未だにわからない。右の穴に通したスリングに体重が少しかかったのかその一部が欠けてブロックが海に落下していき派手な音を立てた。

The Moon (E3 5c) (ツルベでリード&フォロー：ノーフォール)

1p 4c/15m 上記ルートのすぐ右。自分のリードでスタート。岩も固くチョークもついていて、どうやらゴガースにある百万星のルートというのはこれのことらしい。すぐに快適なテラスに出てビレイ。

2p 5c/35m アダムがリード。傾斜の強いコーナー状を右上していく。脆い部分と固い部分がハッキリしていて茶色い硬質の岩肌はかなり信用でき、一転して快適に。露出感の高いルートで気持ちいい。最後はクライムダウンで右に下がりビレイ点に入る。

3p 5b/30m 自分がリード。これも明瞭で岩も固いピッチだった。茶色い固いフェイス部分は安心する。節理は切れ切れでその隙間にプロテクションを入れていくのでどこでも取れるわけではないが不安は感じない。最後はきれいな垂壁を抜けて頂上に飛び出した。アンカーはスパイクと言われる土に刺した鉄柱。どの程度入っているのかわからないが上を持つと揺れる。

5/15

岩場： Lleyn / Craig Dorys (リーン半島/ドリス)

パートナー： 飯山健治

Vroom23 (E1 5b) (飯山リード：フォロー)

下部は城ヶ崎のマニアックなルートのようにフリクションがなくすべりやすい。しかもクラックは湿っぽく快適とはいいがたい。コーナーを上がるにつれて岩はポロポロになった。浮き石が積み重なっているような状態になり抜け口はほとんど泥壁状態。

Direct Hit (E4 5c) 34m (NP リード：オンサイト)

出だしはすこし右から。5mほど登り水平クラックまで行ってそこにプロテクションを二つ。ここから小ハンクを越えてしばらくフェイスとなるが、チョークがあまり残ってはずライン取りに少々迷う。ホールドは出っ張っているものはどれもこれもが欠けそうで恐ろしい。節理の中に手を突っ込んでしまえば安心だが、それでも中がポロポロしている。3mおきに現れる横の節理にカムを突っ込んで、中間の顕著な斜めのクラックに到達。ここはしっかりプロテクションが取れるものと思っていたが、やはりクラックの中がぐさぐさでカムもそのまま飛び出てきそう。むしろナッツの方が固定できる分だけ信頼できる。プロテクションをとる度に安心はするものの、それから少し離れると岩も脆さから不安がよぎる。しかも地面が遠ざかっている分だけリスクが高まっている実感がある。左上クラックから水平クラックに合流、そこから右にトラバースする。

ここからは恐ろしかった。ムーヴは悪いとはいっても11台なのでそんなに微妙なムーヴは出てこないのだが、とにかく手も足もいつ欠けるかわからないようなものばかりで、表

面も砂っぽく、とにかく必要以上に力が入ってしまうので腕も張ってくる。水平クラックのプロテクションははるか下になり、次のプロテクションはどこに取れるのかもはっきりしない状態。安定したエッジに足を上げて立ち込みホツとしても依然プロテクションはとれない。青エイリアンをわずかな節理に突っ込もうとするがほとんど受け付けず気休めにもならない。チョークのついていないカチを使う核心と思われるムーヴのあと、いったいどの程度ランナウトしていたのかわからない。とにかくコーナーの下の水平クラックにたどりつくしかないと思って決死の覚悟で登っていたことだけは確か。下の水平クラックのプロテクション自体も岩の脆さから信頼できる類のものでない。

5/16

岩場：Llanberis / Slate (ランベリス/スレート)

パートナー：Stuart Mcaleese

Ride the Wild Surf (E4 6a) 45m (オンサイト)

このエリアでもっともきれいで目を引くライン。今回初のボルトルート。

スレートという岩質ゆえフリクションはほとんどないのでホールドにそのまま「手に足」するムーヴが多い。ボルトは5メートルおきくらいにしかなく、一本目も遠かったが昨日までのクライミングを考えたら、ただボルトがあるというだけではるかに気が楽だ。

Jack of Shadows (E5 6a) 22m (オンサイト)

左のカンテを回り込んだところにある短めのルート。左から右にカンテをまたいでコーナーに入るまでが核心。ボルトルートであり、あつという間に終わってしまい緊張感もほとんどない分、空虚感が残る。終了点はしっかり整備されリング付きハンガーが打たれている。岩場によって完全に整備の仕方も考え方が変わるようだ。

岩場：Llanberis / Dinas Cromlech (ランベリス/ディナス・クレムレツホ)

Right Wall (E5 6a) 46m (NP リード：オンサイト)

後半は一転してボールドなルートにトライする。出だしは脆そうなアプローチからクラックを左上、岩は硬いので安心感がある。ここからは節理がなくなるもののチョークが多くラインも分かりやすい。いきなりのランナウトだがそれほどの緊張もなくフレークをみつけてダイナーマを押し込んでかけ、黄エイリアンもセット。ホールドはかかりのいいエッジやポケットが多い。次のレッジやプロテクションの取れそうなポケットを目指して多少のランナウト覚悟で登っていく。

薄い岩角にダイナーマをかけ左のフェイスに出て、上に見えるあきらかに安定しそうなレッジを目指してポケット主体のフェイスを上がる。この時点で25mは登っていたが、まともなプロテクションは出だしのクラックにとったカムと5m下のダイナーマだけ。ここでのプロテクションは5cmほどの穴に突っ込んだ紫エイリアンと、下が一部かけたポケットに引っかけたDMMのオフセットナッツ。

ここからは小さなポケットを刻んでいくムーヴ。しかし思ったほどかかりがよくない。ボルトルートならこのまま強引に進んでいくところだが、ここから落ちればすでに10mほ

どのフォールは目に見えている。いくつかホールドを探るが、やはりかかりの悪い小さなポケットを使うムーヴしかないようだ。傾斜は垂直のはずだが露出感が高いだけに前傾しているように感じる。ガバと読んでいた大ポケットは外傾していた。プロテクションも取れない。もうここから落ちるのは許されないうえクライムダウンも無理だ。頭上 2m にレッジへと続くホールドが横に並んでいるのが見える。あそこまで行くしかない。

ポケットを持って足を上げ真上に見えるホールドに手を伸ばす。このランナウトで不確実なこのムーヴ。全身から血の気が引くのが分かった。なんとか届いたそのホールドのかかりは良く足を上げ左上のポジティブなエッジへ。あとは注意深く右にトラバース。スリングを外して上向きのフレークに上からかぶせる。心臓が痛い。あとは細いクラックを直上するだけ。もうここから上はダブルロープも交差しようがなにしようがかまわず上へと抜けた。

ボルダー

Jerry's Roof (V9)

ジェリー・モファットによる、この地を代表する有名課題。2 回目で完登。

5/17

岩場 : Pen Trwyn (ペン・トルウィン)

パートナー : Stuart Mcaleese

(以下の 3 本はボルトルートのためグレードはフレンチグレードが使われている。)

The Bloods 7a+(5.12a) (オンサイト)

Axle Attack 7a+(5.12a) (オンサイト)

Mayfair 7a+(5.12a) (オンサイト)

どれもこれといった特徴のない石灰岩のスポーツルート。ボルトの間隔は近く完全にスポーツエリアと割り切った開拓がされているようだった。昨日までの一本に匹敵する満足感を得ることはできなかった。

ボルダー

岩場 : Parisella's Cave

Clever Beaver (V8)

Beaver Cleaver (V8)

大ケイブにある課題。どちらもローカルのボルダラーに聞かないとラインが分からない。数回のトライで完登。

(イギリスのグレードについては別紙 4 参照のこと)

7. 雑感

今回の 8 日間のノース・ウェールズでのクライミングで得たものは多かった。技術面や装備面では特段取り立てるほどのことはなかったが、精神面、特にクライミングというものに対する考え方そのものに大きな影響を受けた。

イギリスがトラッドクライミングの本場であることは充分承知していたし、自分らもそ

の手のクライミングには精通していたつもりだったが、この国で行われているトラッドは想像をはるかに凌ぐものであった。

とにかく残置支点を排除しようとするその姿勢は徹底している。日本で例を挙げるなら、湯河原幕岩や城ヶ崎、アルパイン系の岩場なら滝谷や一ノ倉沢に一本のピトンやボルトがない状態を想像してもらえればいい。そのような岩場に人工的なプロテクションを一切用いず、しかもフリーで登られた、とてつもなくボールド（大胆）なルートが所狭しと並んでいる。

大きく言えることは、イギリスのクライマーたちはどんなに短いルートであれ、それをひとつの冒険として捉え、徹底的にスタイルにこだわってきたということである。プロテクションに乏しいこれらのルートで落ちることは許されない。かといって安易なエイドの使用や、ボルトプロテクションによるスポーツ可に逃げることもなく、クライミングが本来持つ原始的な登り方、つまり岩を一切傷つけることなく、しかもフリーで、落ちずに登ろうとしたクライマーたちは肉体的にも精神的にも自然と強くなっていった。

なぜイギリスからは過去から現在に至るまで、世界的レベルのクライマーが途切れることなく次々と輩出されるのが不思議でならなかったのだが、このような土壌で育まれたトラッドクライミングがベースにあったというならば、それも納得できる。

もうひとつ感心したのは、それらの伝統が各岩場でしっかりと継承され、なおかつトラッドエリアとスポーツエリアの住み分けがきちりと成されていることだった。ある時期、安易な方法にすべての岩場が傾いていった日本とはここが根本的に大きく違う。少ない岩場と、そこで培われた伝統的な手法、そしてその結果として生み出されたボールドなルートの数々。それらの中にある精神性を後世に残していこうとする姿勢がうかがえた。

わずか8日間のミーティングではあったが、それが私たちの中に残したものは計り知れない。トラッドの何たるかについて議論を交わしたわけではない。ただイギリスのクライマーと組み、その地のルートを登るだけで、彼らが言わんとしていることは十分に心に突き刺さってきた。今思えば、それこそがまさに BMC サマーミートの目的であったのだろうと思う。これらの経験を今後日本のクライミング界にもフィードバックしていきたいと考えている。

以上

The ROCKFAX Grade Table **ROCKFAX**.com

BRITISH TRAD GRADE (For well-protected routes)

	Sport Grade	UIAA	USA	Norway	Australian	South Africa
Mod <i>Moderate</i>	1	I	5.1		4	6
Diff <i>Difficult</i>	2	II	5.2		6	8
VDiff <i>Very Difficult</i>	2+	III	5.3	3	8	9
HVD <i>Hard Very Difficult</i>	3-	III+	5.4	4	10	10
Sev <i>Severe</i>	3	IV	5.5	4+	10	11
HS <i>Hard Severe</i>	3+	IV+	5.6	5-	12	12
4a VS <i>Very Severe</i> 4c	4	V-	5.7	5	14	13
4c HVS <i>Hard Very Severe</i> 5b	4+	V+	5.8	5+	16	14/15
5a E1 5c	5	VI-	5.9	6-	18	16
5b E2 6a	5+	VI	5.10a	6	18	17
5c E3 6a	6a	VI+	5.10b	6	19	18
6a E4 6b	6a+	VII-	5.10c	6+	20	19
6a E5 6c	6b	VII	5.10d	6+	20	20
6b E6 6c	6b+	VII+	5.11a	7-	21	21
6c E7 7a	6c	VIII-	5.11b	7	22	22
7a E8 7b	6c+	VIII	5.11c	7	23	23
7a E9 7b	7a	VIII+	5.11d	7+	24	24
7a E10 7b	7a+	VIII+	5.12a	7+	24	25
7a E11 7b	7b	IX-	5.12b	8-	25	26
	7b+	IX-	5.12c	8	26	27
	7c	IX	5.12d	8	27	28
	7c+	IX+	5.13a	8+	28	29
	8a	X-	5.13b	8+	29	30
	8a+	X	5.13c	9-	30	31
	8b	X	5.13d	9	31	32
	8b+	X+	5.14a	9	32	33
	8c	XI-	5.14b	9+	33	34
	8c+	XI	5.14c	9+	34	35
	9a	XI+	5.14d		35	36
	9a+	XI+	5.15a		36	37
	9b	XI-	5.15b		37	
	9b+	XI	5.15c		38	